Concurrent acceptance analysis of Okamoto Kanoko's *Shojyoruten*

MATSUMOTO, Katsuya

In this paper, I discuss Okamoto Kanoko's *Shojyoruten*. This work, after the death of Kanoko Okamoto, a full-length novel, which was announced through the hands of Ippei Okamoto. *Shojyoruten* is one of the masterpiece of Okamoto Kanoko, has been already its charm is told, a full-fledged research has not progressed.

Criticism was announced monthly in newspapers and magazines at the time *Shojyoruten* was serialized. Among them, good or bad or monthly can, various features of Okamoto Kanoko went been pointed out. In addition, six book reviews were announced after the monograph *Shojyoruten* was published. In this paper, I also analyzed them and clarified what the underlying A understanding was as well as the superficial pros and cons.

Together with the above, I revealed the process and the facts that gained a high reputation for *Shojyoruten* at the time of the presentation.

岡本かの子「生々流転」同時代受容分析

松本和也

Ⅰ　はじめに

アジア・太平洋戦争末期、石川淳は「岡本かの子論」（佐藤春夫・宇野浩二編『近代日本文学研究　昭和文学作家論　上巻』小学館、昭一九）において、岡本かの子『生々流転』（初出『文学界』昭一四・四～一二／改造社、昭一五）にみられる言葉の運動について次のように評していた。

娘の生命は作者の智慧の作用にほかならない。そして、娘と関係をもつ諸人物の性格は娘の内部なる心理感情の陰影に対応するものにほかならない。あたかも、それは作者が娘の旋回運動を特定の方向に誘導するために、要所要所に配置した刺戟性の仕掛のやうである。めまぐるしく駆けまはるのは娘だけで、他の諸人物はそれぞれの配役の範囲でしか動かない。これはもつぱら作品の前半、つまり娘が乞食になる以前に出没す

る人物のことに係る。娘が乞食になつて以後は、もう方向が作者のおもふ壺にはまつてしまつて、あとは誰はばからぬ縁起観の洪水で、当の娘さへその波の起伏のままに流されて行くていなのだから、まはりの仕掛はとうに不要になつて、他の人物が顔を出す余地がなくなる。うようよつながる人間らしいものは、娘が流れながらに見て過ぎる現象でしかない。（三一四頁）

また、先行研究においても、やはり蝶子に注目しながら『生々流転』のエッセンスを一挙につかみとろうとする、小田良弼による次のような評言がみられる。

一切をかなぐり捨てて、人間の前提条件たる知性と社会性とをもかなぐりすてて根源の世界へ還らなんいざの想ひにかりたてられるわけである。かの子の最大の傑作であつた「生々流転」における蝶子の辿つたのもこの道筋であつたのである。(1)

あるいは岡本かの子からの影響を隠さない実作者にとっても、『生々流転』は特別な小説であるようだ。《短篇だけで荒っぽい私の感受性が岡本かの子の生命の感覚を摑み得たかどうか心もとない》とかの子文学に言及する津島佑子は、次のように書き記している。

今でも私は短篇を幾つか読むよりは「生々流転」一篇を読みたいという気持が強い。「生々流転」を書いた

岡本かの子が一番岡本かの子自身に近いような気がしてならないのだ。

それにしても「生々流転」は私を驚かせ、いやでもこれは日本文学全集を丁寧に読まなくては、という気持にさせた。どこでどんなものに巡り会うか、全く分からない。「生々流転」はそれまで私が読んでいた小説のどれともかけ離れた不思議な作品で、こんなになまなましく作者の体温が伝わっている小説もあり得るのか、と私はその不思議に圧倒されながら読み続けた。(2)

《不思議》の一語は、『生々流転』を論じる際に頻用されてきたキーワードでもあるが、これは少なからぬ読者が、論理的には説明し難い圧倒的な魅力を『生々流転』に見出してきたことの証左でもあるだろう。もとより、『生々流転』の概要を記述するという試みがなかったわけではない。そのコンパクトな一例として、次の一文を参照しておこう。

「乞食の血筋出の大学教授の妾の子」として育った蝶子が、許婚候補の「怜悧で人の良い青年」池上清太郎、そして彼女が通学していた都内の「F―学園」に勤める「園芸手」で「何の癖もない大柄の青年」葛岡、「体操の女教員」の「中性的の老嬢美人」安宅先生との交渉を経て、母の死を契機に「乞食」となって生活し、最後に「女船乗り」となるまでを物語るという内容である。(3)

さらには、初出誌にしてのべ四二八頁、初刊単行本にして五三九頁にも及ぶ長さゆえもあって、明示的な章立

てがない『生々流転』について、何かしらの分節によって全体を理解しようとする試みも複数試みられてきた（冒頭に引用した石川淳の一文も、作品を前後半に二分している）。『生々流転』について、《「わたくし」の語りによって、連綿たる巡遊の雰囲気を保つために章立てこそなされていないが、構成は非常に意識的に考えられている》と指摘する荒井とみよは、モチーフに即して次のような構成を提示している（各項目の末尾に付された頁数は、『岡本かの子全集　第六巻』〔冬樹社、昭五〇〕による）。

Ⅰ「わたくし」、蝶子の十六歳までの生い立ち、父と母について、女学校F―学園のこと、池上と葛岡について。（四六頁）

Ⅱ　F―学園の女教師安宅先生の退職と出奔、池上の寮での蝶子の軟禁状態に近い日常、そして葛岡との再会。（一六一頁）

Ⅲ　安宅先生を訪ねて蝶子と葛岡との赤城山行きと安宅先生の話。（二三三頁）

Ⅳ　葛岡と蝶子の帰京、蝶子の製菓会社特別室での仕事、そして母の死。（二七二頁）

Ⅴ　蝶子の乞食行、乞食群像と蝶子の就職。（三六三頁）

Ⅵ「おぢさん」の手紙と蝶子が女船乗りになるまで。（終）[4]

また、『生々流転』を《何度読んでも不思議な小説》、《不思議な構造をもつおもしろい小説》だと評して絶賛する川西政明は、その構成について次のように整理している。

『生々流転』の構成を見ると、大きく三つの柱が建っているのがわかる。第一の柱は「わたくし」が女乞食になる以前までの生々流転ぶりを書いているところにあり、第二の柱は「わたくし」が女乞食になって以後の生々流転ぶりを書いたところにあり、第三の柱は市塵庵春雄という「おじさん」から「蝶子＝わたくし」宛の手紙のところにある。(5)

『生々流転』を理解するための補助線として、作品史的な位置づけも試みられてきた。『生々流転』を《いわば表紙のない書物》、《題名もなく作者名もなしに、砂の吹きさらす護座のおもてや、貨客船の船底の上に辛うじて宙吊られた中二階の踊り場あたりに抛り出されていて、たまさか、これっきりの読者の橙黄色の視線によって読まれ継がれて行くはずの書物》(6)と評す天沢退二郎は、「河明り」を《一傑作でありつつもなお、「生々流転」のごとき世界へ到達するまでの一個の過渡的作品》だと位置づけた上で、そのゆえんを晩年の三作品の関係として次のように配置してみせる。

なぜなら、岡本かの子という作家の作品行為史は、いってみれば、川の語りをききとることから、ついに自らの語りを豊沃な大河たらしめることへの、たえざる進展・流下とかんがえられるからであり、死後発表の二長篇「女体開顕」「生々流転」こそは、「河明り」のさらに下流の、豊沃な流れそのものだからである。(7)

ここでは、河＝水という作家論的なテーマに即して、「河明り」が展開したその先として『女体開顕』と『生々流転』が位置づけられている。次に引く金井美恵子も、かの子的なモチーフが流れこむ場として『女体開顕』と『生々流転』を捉えている。

『女体開顕』『生々流転』の二作は、河が下流へむかうにしたがって支流を束ねて河幅を蕩蕩と広げ流れるように、岡本かの子の他の小説のあらゆるモチーフをのみ込んでいる。二つの作品を通して力強いモチーフとなっているのは女主人公の成長ということでもあるのだが、少女の成長と水源の水が大地をたどって上流から下流の海へ向う川の成長とぴったり重なりあうことによって、いわゆる形式も主題もととのった教養小説などには到底なりようがない、それより以前に、はるかに暴力的な異様さでもって、作品への夢と作品を成立させようとする願望を語りつくそうとするのである。(8)

こうした『生々流転』をめぐる批評言説のほとんどが、作品全体を丸ごと解釈しようとしてきたのに対し、研究論文では作品の具体的な局面についても論及されてきた。《春秋に富むヒロイン蝶子が乞食行に出るという意表をつく展開に異色性があり、そこに作品世界を読み解く鍵もある》(9)と指摘する岩淵宏子は、民俗学的アプローチから『生々流転』を読み解いた。また、登場人物の安宅先生に注目した安藤恭子は、スポーツ／身体という観点から『生々流転』の特徴的な一面を明るみにだしている。(10)さらに、『生々流転』の一人称に注目した関礼子は、《存在の根さがしという主人公の個人幻想が挫折する必然性は、他者たちとの葛藤を欠いたかの子の「女性一人

称」という語りの枠組のうちに内在していた》[11]ことを指摘している。

最後に、かの子の遺稿について繰り返し論及されてきた夫・岡本一平の関与についてもふれておきたい。この点については、すでに瀬戸内寂聴による重要な指摘[12]があるが、それを承けた宮内淳子は、「作家案内」執筆に際して《「作家案内」という題名で書くとき、では作家とは何かと問うことは野暮でもあり、論ずるにふさわしい場所でもない。しかし『生々流転』が《作者》というもの、また《作品》というものについて、読者に問題提起をし緊張を強いるものであることは、あらかじめ断わっておかねばならない》[13]と書きおこし、かの子の遺稿を論じるに際しての、作家概念をめぐるを表明している。[14]

翻って、本稿は発表当時の「生々流転」、初刊単行本『生々流転』が、どのように受容されていたのかについて、同時代受容の地平－モードという観点から調査・分析を試みたい。というのも、荒井とみよが指摘するように、《多くの批評が「生々流転」の魅力についてふれているが、その実体は必ずしも示されてない》[15]、ことにその読まれ方―同時代受容についてはまだ十分な研究が進んでいないからだ。そのことにくわえ、かの子神話や先行研究を相対化する意味でも、また同時代の文学場を検討するための一視角としても、本稿の作業は有意のものだと考える。

Ⅱ　初出「生々流転」の同時代受容

「鶴は病みき」の実質的な文壇デビューから、またたくまに円熟を迎えた岡本かの子は、しかし昭和一四年二

月に急逝する。[16] ただし、かの子の文学活動はそこで終わることなく、岡本一平の手を介しての、質量ともに充実した遺稿の発表がはじまっていく。その大きな柱の一つが、「生々流転」である。

まず、初出「生々流転」の掲載状況をまとめておく。

連載第一回　岡本かの子「生々流転」（『文学界』昭一四・四）、
四～八〇頁（末尾に「（未完）」とあり／掲載頁数＝七七頁、以下同）

連載第二回　岡本かの子「生々流転（続）」（『文学界』昭一四・五）、
一〇〇～一三〇頁（末尾に「（ツヅク）」とあり／三一頁）

連載第三回　岡本かの子「生々流転（続）」（『文学界』昭一四・六）、
四～八〇頁（末尾に「（未完）」とあり／七七頁）

連載第四回　岡本かの子「生々流転」（『文学界』昭一四・七）、一五一～一七三頁（二三頁）

連載第五回　岡本かの子「生々流転」（『文学界』昭一四・八）、九八～一二〇頁（二三頁）

連載第六回　岡本かの子「生々流転」（『文学界』昭一四・九）、一一八～一四三頁（二六頁）

連載第七回　岡本かの子「生々流転」（『文学界』昭一四・一〇）、一一三～一六七頁（五五頁）

連載第八回　岡本かの子「生々流転」（『文学界』昭一四・一一）、
八九～一三六頁（末尾に「（つゞく）」とあり／四八頁）

連載第九回　岡本かの子「生々流転」（『文学界』昭一四・一二）、

四四～一一一頁（末尾に「（完）」とあり／六八頁）

これら九回分の連載をまとめて、翌年、単行本『生々流転』（改造社、昭一五・二）が上梓される。以下、連載各回の発表ごとに同時代評をとりあげ、分析を試みていく。

連載第一回については、九本の同時代評が確認できた。この月のかの子作品としては、「生々流転」の連載が『文学界』で開始されると同時に、「丸の内草話」（『日本評論』昭一四・四）と「河明り」（『中央公論』昭一四・四）も発表されている。

窪川稲子は「複雑の美について　文芸時評（1）」（『読売新聞』昭一四・三・二九夕）で、同月発表の「河明り」、「鮨」（『文藝』昭一四・一）、「家霊」（『新潮』昭一四・一）といったかの子の近作にふれながら、「生々流転」については《いよ〳〵岡本さんの円熟を思はせるもの》だとした上で、次のようにかの子の作家性―《観念》を読みとっている。

「生々流転」は未完でどんな風になつてゆくのか今のところは分らない。もとは乞食の子であつたのが見込まれて出世をした父と、その妾を母にもつた美しい才気ある娘が描かれてゐる。父の最後のあたり、乞食の子はやはり乞食の生活を懐しがる、と言つたやうな岡本さんの観念が見受けられるが。（二面）

《「中央公論」、「文学界」、「日本評論」の三雑誌にこの作家の遺稿が載つてゐる》ことにふれ、《私はそれを叮

嚀に読み、すべて傑れてゐるのに敬服した》という、「文芸時評（1）小説と展覧会」（『東京日日新聞』昭一四・三・二九）の水原秋櫻子は、《仮りに順位をつけて見ることにすると、私は大に迷ふのだが、まづ第一に「生々流転」（文学界）をあげたい》と判じて、《乞食の子がその才能を認められて事業家の娘の婿になり、妾腹の娘が出来るが、その娘が主人公になつてゐるので、通学してゐる郊外の学園の様子や父教授の死んだ後の母の周囲などが実に活き〳〵と明るく描き出されてゐる》（五面）点を顕揚している。

水原同様に、この月発表のかの子作品《三篇を通読して、惜しい女流作家を死なせたものかなと、遅ればせながら嘆息した》という杉山平助は「文芸時評（2）惜しい女流作家」（『東京朝日新聞』昭一四・三・三〇）において、次のようにその作風を論評している。

この作者は、明かに本能的なものにおいてすぐれてをり、本能を通じて、叡智的なるものに到達しようとするので、その本能の過剰さのために、溺れてしまつて、喘ぎ、容易に目標に到達されないやうな人なのだ。それにもかゝはらず、その本来具へてゐるもの、逞しさと、ねばり強さのために、いつかはその最後の目標に到達するであらうと思はせるやうな作家なのである。

その上で、杉山は《彼女が問題を意外に豊富に持つてゐる》ことに《感心》したというのだが、その内実は「生々流転」から読みとられた《階級問題》（七面）にあるという。

同月号の雑誌掲載創作を一瞥して、かの子の《遺作が三点》あるのを見出しては、《最後の光焔のやうな気が

して痛ましい》とその死を悼む「文芸時評　岡本、火野、中山、志賀氏など」（『帝国大学新聞』昭一四・三・三一）の上林暁は、「生々流転」について《明治の育ちと現代の生活、下町の人情と山の手の理智――かの子女史の一生は、その相剋の波に漂つてゐたと言つてよろしく、「生々流転」のなかの女主人公にその姿は宿つてゐる》と、作中人物である蝶子と現実世界の小説家であるかの子とを重ねつつ、《かの子女史の感覚や人生観は、明治の育ちと下町の人情の方が勝つてゐて、やゝ古風で大時代的な感じがする》（九面）と評している。「生々流転」を読んで、《近作「鮨」「家霊」等に一脈通じてゐる人間宿業のあはれが全編を貫いてゐる》と評したのは「文芸時評」（『文学者』昭一四・五）の田邊茂一で、《未完なので、断定のほかではないが、大人びた、早発な少女の感情は、闇に光る猫の眼のやうに勁い》（二一七頁）と、蝶子に注目して評価している。

また、「生々流転」批評を通じて、かの子の特徴も繰り返し指摘された。「河明り」、「丸の内草話」に比して「生々流転」を《一段とたちまさつてゐる》と判じる「創作時評」（『新潮』昭一四・五）の神田鵜平は、《もつとも、この作家の悪癖は、まだ清算されきつてはゐない》と付言して、その内実を《一方からいへば神経の逞しさ、その反対側からいへば、おしつけがましい無神経さ》だと指摘した上で、《それがなければ、彼女の芸術は存在し得ない》ところに、かの子の《芸術の謎》（二〇〇頁）をみている。《先づ豊潤な才能に富むこの作者の急逝を悼む》（二八三頁）と評す「創作月評」（『文藝』昭一四・五）の天下泰平は、「生々流転」の重層化された二項対立に注目して次のように論評している。

遺作『生々流転』は未完に終つてゐるが、習俗美の新しきものと伝統的なもの、性格に在る宿命的なものと

後天的なもの、愛欲に潜む不可思議な原始的感情、さういつたものを、東京の下町に妾腹の子として育ち、しかも近代的教養を受けたコケティッシユな若い女の運命を中心にして、対照的に、或るところはまた調和的に描いてゐるのである。一方、明治中期から大正昭和に掛けての東京の風俗、浪曼味に富んだ市民的口碑、さういつたものも併せ写してゐるのである。ところで、いろいろなものをブチ込んで描いてゐるのにも拘らず、また以前の作品によく見受けた筆触上の精粗のムラはこの作中にも多少あるが、題材の中心的なものはよく把握されてゐるのである。色彩、味はひも豊かで、一方、面白くもあるのだ。殊に目に附くのは、喰べ物に対する都会人的な繊細な感覚である。これはまた作者が持つてゐたものだらうと思ふが、それを透して都会人の或る性癖を突いてゐるのは、じつにこの作者独特である。（二八四頁）

《おそらく自伝と思はせつつ幻想をまじへ、幻想の如くにして自伝でもある》ような「生々流転」のありようこそが、《実はこの作家の世界であつたはずだ》と指摘するのは北岡史郎「文壇時評」（『若草』昭一四・五）で、次のようにその内容が把握されている。

乞食の子だつたのが拾はれて富豪の養子になり、そして、さうした人を父として生れ育つた蝶子の内にひらけてゆく青春と、その青春のうちに生きつづけてゐる父と子との血液や運命の陰翳のやうなつながり、それを幻想的に現実的に美しく織りだしたのがこの一篇である。〔略〕蝶子の青春の美しさと切なさはやはりよく描けてゐる。池上といふ青年と向島に遊ぶあたり、それから多摩川畔のあたり、やはり独特の幻想的な

詩の世界である。（三六頁）

こうしてみてくると、遺稿の連載初回ということもあって　連載期間中最も同時代評が産出された連載第一回については、かの子の晩年の円熟、急逝への哀悼を枕としながら、「生々流転」の内容が紹介され、その独特の作家性に基づく作品世界が、かの子らしい悪癖への言及を付し、しかし大勢としては好意的に評されていった。中でも北岡評においては、《詩》という評言によってその芸術性が高く評価されていった。[17] また、自伝としての受容がすでにはじまっていたこたとも確認できる。

連載第二回については、八本の同時代評が確認できた。この月のかの子作品としては、「ある時代の青年作家」（『文藝』昭一四・五）と「雛妓」（『日本評論』昭一四・五）も発表されている。

「生々流転」と「ある時代の青年作家」とに論及し、かの子の遺稿を《最後の花を飾つて気を吐いてゐる》と評す一二三「豆評論　戦争解消女流作家」（『信濃毎日新聞』昭一四・四・二五）では、《死者の作品を今月もまた批評しなければならないと思へば憂鬱になるがパツと花咲いて脆くも逝いたこの作者の作品を熟読玩味出来ると思へばまたたのしい》（四面）と、遺稿ではありながらも、かの子作品への高い信頼と期待を言表している。

《今月の各雑誌の創作欄を開いてみてとにかく第一に目につくのは〔略〕岡本かの子の相変らずの大変な遺稿だ》と、かの子の遺稿三作に論及する「文芸時評【四】美しき姿勢」（『東京日日新聞』昭一四・四・三〇夕）の中野好夫は、《『生々流転』の先月分が傑れたものであつたことは異存ないが、今月はむしろ中だるみにあるのではないか》として、次のように否定的に論及している。

書出しの長々とレトリツクやパセテイクフアラシー沢山に梅の開花を述べる件りからして、作者の眼が対象の中に食ひこんでゐるといふよりは、反対にある弛みからくる隙間をごま化す思はせぶりの技巧に見える。（五面）

「生々流転」と「雛妓」に論及する「文芸時評（3）二種の戦争文学」（『読売新聞』昭一四・五・三夕）の宇野浩二は、《岩野泡鳴も、芥川龍之介も、死ぬ前の一年程の間に、彼等としては異常と思はれるほど多くの作品を発表したが、彼等と比べても、岡本かの子の晩年の一年程の作品の数は、その枚数と共に図抜けてゐる。その代り、岡本の総ての小説は未完成で生のところがある》（二面）と、かの子晩年の創作ラッシュとその作風について作家論的に論及している。

雑誌評に移れば、連載中ゆえにであろう、「生々流転」について《今論ずるわけに行かぬ》という「文芸時評」（『早稲田文学』昭一四・六）の浅井眞男は、しかし《氏は多くの女流作家の中ではとも角作家的風格を備へてゐたと言へやう》（一五三頁）として、作家かの子については高く評価している。「生々流転」第二回分にふれて《先月号のは感心したが、この月の分には参つた》（五六頁）と評す神田鵜平「創作時評」（『新潮』昭一四・六）においても、当該月のかの子の遺稿三作品にふれて《驚くべき制作力の持主であつた》（五四頁）とかの子を顕揚している。連載第二回にふれる田邊茂一も、「文芸時評」（『文学者』昭一四・六）で《前篇の怪しい煽情性が、漸く凡化してきた感じ》（二二九頁）だと評しており、いずれも連載第一回に比して第二回は相対的に低めの評

価となっている（もとより、これらはいずれも、連載第一回への高い評価を前提とした上での同時代評ということでもある）。

作家論的にかの子を絶賛したのは、《「文学界」の創作欄が、既にこの世にない岡本かの子氏の「生々流転」の他に、特筆すべきものが見当らないのは貧しいこと》（一四〇頁）だとした上で、かの子の遺稿から《鮮やかにして華々しく光を含んで咲いてゐる豊饒な花の香り》を感じとった「小説月評」（『文芸日本』昭一四・六）の竹森一男であり、竹森はかの子の作風（創作の秘密）を次のように分析している。

> 岡本氏のエロは健康な処女の高められた教養の上に匂つてゐるので、作品の中に鼓動する青春が溢れるがまゝに手を伸ばしてゐながら、四十幾歳の人間経験を豊富に持つた作家の眼がきらりと光つてゐるから、「生々流転」のやうに観念の中で作つてゐる夢物語のやうな茫乎とした物語りも隙のないレアリテイの地盤が揺がないのである。（一四二頁）

あるいは別の角度からは、無署名「文学界」（『三田文学』昭一四・六）において、《通俗小説と純文学との垣根など、いつのまにどこへケシ飛んでしまつたものか》、《こうしたときに岡本かの子の「生々流転」のごとき寛達な文学に接し得ることは嬉しいことだ》（一五七頁）と、ジャンル横断的なかの子文学の破壊力が、好意的に迎え入れられている。

ここで連載第二回の同時代評について見渡せば、前回に比して評価がトーンダウンしたことは否めないが、そ

れでも現役作家に比しておよそひけをとらない評価は確保しつつ、いよいよ明らかになりつつある遺作の質量も併せて、その存在感は広く承認されていった。

また、連載期間中の同時代評で唯一、神田鵜平「創作時評」（『新潮』昭一四・六、前掲）に《のこされたる岡本一平の、遺稿整理にあたる嘆きと心労とが察せられる》（五四頁）といったかたちで、岡本一平の関与への具体的な言及がみられたのもこの時であった。

連載第三回については、一本の同時代評が確認できた。神田鵜平が「創作時評」（『新潮』昭一四・七）において、連載第三回分について《第一回の時の期待が、だんだん裏切られて来る》（一五二頁）と評している。

連載第四回については、二本の同時代評が確認できた。神田鵜平は「創作時評」（『新潮』昭一四・八）で、《岡本かの子の「生々流転」は今月も未完だが、すこし惰勢でつづいてゐるやうな感じだ》（一〇八頁）と、前月号につづいて否定的な評価となっている。他に、無署名「読んだものから」（『三田文学』昭一四・八）でも、かの子の遺稿について《いよ〳〵彼女の作家としての「大」を証するものが多い》とした上で、《「文学界」に連載中の「生々流転」は長さに於て「やがて五月に」に比ぶべきものであるが、作品の好さは「中央公論」に発表した「河明り」が圧巻であらう》（二〇六頁）と論及している。いずれも、作家かの子とその遺稿には一定以上の評価をしながらも、当該月の連載分については冷ややかな反応となっている。

連載第五回については、三本の同時代評が確認できた。

まず、「文芸時評（二）二つの遺稿」（『東京日日新聞』昭一四・八・二夕）の上司小剣が、《魂祭りの盆過ぎたばかりに、いまは亡き人の遺稿を三つ読んで、言ひ知れぬ哀傷の感に打たれた》として、明石海人「高圧線」・

「双生樹」とあわせて「生々流転」にふれている。そこで上司は、「生々流転」について《故人の特色のよく出てゐる作であるが、筆に疲れのあとが見える》としながら、特徴的な場面に《哀しみの音を感》じ、あるいは《哀れ深》さを読みとっている。さらに、同時代におけるトピックとの関連という視点から、《土の文学、すなはち農民文学と都会文学とが至るところで嚙み合つてゐる》（五面）とも指摘している。連載を追ってきた「創作時評」（『新潮』昭一四・九）の神田鵜平は、連載第五回について《今月のところは、興味ある挿話で救はれてゐる》、《この作品は一気に通読して味ふべきもののやうに考へられる》（七二頁）と、前月分までに比べて高く評価している。連載第四～五回を読んだと思しき無署名「文学界」（『三田文学』昭一四・九）では、《この二月程核の廻りを堂々めぐりをしてゐるありさま》、《女主人公の成長が見られないで、少々低徊の気味》（一六五頁）だと、連載当初に比しての停滞感が言明されている。

連載第六回については、一本の同時代評が確認できた。「創作時評」（『新潮』昭一四・一〇）の神田鵜平は、《ひどくロマンチツクなものになつて来た》（一〇三頁）と、賛否はともかくとして、展開の変化が読みとられている。

連載第七回については、二本の同時代評が確認できた。《最終のところで、この作品の冒頭に立帰つてゐる》ことを以てだろう、「生々流転」連載について《この月で終つたのだらうと思ふ》と判じた「創作時評」（『新潮』昭一四・一一）の神田鵜平は、連載途中では中だるみを指摘していたものの、完結という前提に立って次のように絶賛している。

この長篇小説はこんな狭い欄でかれこれ言へるものではない。いままでに発表された岡本かの子の小説では、最も力量のこめられた小説である。大きなロマンである。（七七頁）

連載された「生々流転」について《頭としつぽだけ、なかは読んでゐない》という「文芸時評」（『早稲田文学』昭一四・一一）の佐々三雄も、連載第七回を最終回だと判じた上で、《たつたこれ一つが、今月のなかで、全生命力をあげて生きてゐる。ママ唯一のものとぼくはすつかり心うばはれてしまつた》（七三頁）と絶賛しては、次のように論評している。

こんな小説はなんで持つてゐるといふのだらう。リアリズムか、ロマンチズムか、心理主義か厳な精神か。どうも余りあてはまる言葉がない。自分でいのちとつけたやうに、いのちの潤爛といふより外ないだらう。どうしてひとはもつとこのひとを問題にしないのだらう。江戸文学始まつて、明治から大正今日に至るまでをひつくるめ、おそらくその一番最後にあたつて、最高峰を占めるひとではないのか。（七四頁、傍点原文）

ここで、その魅力をうまく捉える言葉の不在にいきあたる佐々は、かの子自身の言葉に即して《いのち》と称しては、江戸以来の文学史上における《最高峰》とまで激賞する。

このように二人の論者が、揃って連載第七回を最終回だとみなしたのは、おそらく次の理由によるだろう。確かに、目次にも「生々流転」末尾にも編輯後記にも、最終回であることを明示的に示す表徴はないが、初出誌一

六五頁には、冒頭部の反復となる「遁れて都を出ました。」以下の一節がみられ、つまりは円環構造が閉じたようにみえるのだ。しかも、末尾には「作者、評して曰く「錯を将つて錯に就く」」（一六七頁）と記されてもおり、「完」に類する文字こそみられないものの、いかにも結末らしくみえるのだ。そのことが、「生々流転」全体への評を生みだす契機ともなったのだろうが、双方とも作家・作品の双方を、きわめて大きなスケールで捉えては顕揚している。

連載第八回については、一本の同時代評が確認できた。

三戸武夫「文学界」（『三田文学』昭一四・一二）において、林房雄の「壮年」と併せて「生々流転」にふれ《それぞれ面白かつた》（一六四頁）と、好意的に評している。他に、武田麟太郎・中野重治「今年の小説（対談会）」（『文藝』昭一四・一二）において武田は、《月評をやつたものの中で、一番頭に残つて居るのは何ですか》という記者の問いかけに対し、《「ひなどり」、岡本かの子の遺稿、それから中野君の「演習」ね》（一七四頁）とこたえ、一年の収穫としてかの子の遺稿を評価している。

連載第九回・最終回については、三本の同時代評が確認できた。いずれも、これまでの「生々流転」評、さらには生前からのかの子評（かの子賛）の延長線上に位置づけることができる。

そのことを端的に示したのは、「生々流転」完結にふれて、《岡本かの子を論ずる場合に、絶対にとりおとしてはならぬ作品》だと評した嵯峨傳「創作月評」（『新潮』昭一五・一）で、《岡本かの子のよいところも、悪いところも、この作品にはあまさずに出てゐる》（三〇四頁）とそのゆえんを言明している。やはり「生々流転」完結にふれる無署名「文学界」（『三田文学』昭一五・一）では、《この複雑怪奇な嶮しい世相のうちで、半年間、

この揚達な作品をめぐまれたことをまづ故人に感謝しなければならない》とした上で、《当面の感想》として《偉大な童話を読んだやうな気がする》、《小供のとき、母から聞かされたそれ等のやうな感慨が浮ぶ》（二二七頁）と、かの子の母性的な魅力が感受されている。この段階で本格的に「生々流転」を絶賛したのは、「長篇小説評（2）天才的な作家」（『東京朝日新聞』昭一五・一・一五）の小林秀雄である。《最近の長篇小説で、僕の心を読後感で一杯にしてくれたのは、岡本かの子氏の遺作「生々流転」》だという小林は、《恐らくこれは未定稿でもあり、未完でもあるが、たとへ定稿完結といふ事であつても、作者は、沢山の半ば無意識な破綻を残したと推察される》、というのも《それほどこの作の意図には烈しく、切羽詰つたものが感じられる》からだとして、小説の結構をこえたかの子の作家性を探りあてている。その上で、《「生々流転」といふ題の示す通り、これは恐らくひたすら人間の命の姿をもつと間近にもつと純粋にといふ風に目がけて絵巻様なものが描けると自信した作》だとそのテーマを指摘しては、《かういふ仕組みの小説は、作者の意図する意気込みを裏切り普通、凡庸な観念小説に堕し易いが、岡本氏の場合では、その非凡な肉感性が、これを救つてゐる》と、陥穽をのりこえたかの子の《非凡》さに瞠目し、かの子の特異な作家性について、次のように論評していく。

この作者には、恐らく天稟といへる様な豊かな抒情と瑣事の観察の才があり、さういふ才能が、観念上の分析の、切実だが破綻に充ちた進行に伴つて、之は又完全に見事に進行する。これは一種不思議な美しさだ。この作は、僕には一種の呪文めいて感じられる。いのちに関する思想といふ様な堂々たるものではない。又、祈りといふ様な静かなものでも謙虚なものでもない。言葉には新しいものがあるが、味はひには原始的な、

一念を掛けたと云つた呪文の様な印象が残つた。作者は賭けたのである。救はれるか救はれないか自問自答の形で賭けたのだ。（五面、傍点原文）

ここで小林は《不思議》という表現を用い、小説としての少なからぬ瑕疵を超克していく《才》を（作品「生々流転」というよりは）作家・岡本かの子に見出し、それゆえ小説としての尺度をこえた《不思議な美しさ》が「生々流転」から読みとられているのだ。

もとより、小説としての尺度を評者が押しとおせば、「生々流転」にしてもかの子にしてもその評価は一挙に下がることになるのだが、容易にはそうさせない説得力がかの子作品には宿っているようである（この両義的な評価の具体的な例は、次節で検証する）。

総じて、初出の連載「生々流転」全九回は、実にかの子らしい作品として、従前のかの子評価を引きつぎながらも、遺稿ながらさらに増した迫力を以て、現役の文学者による作品と対等（以上）の注目を集めていった。そこでは、多少の瑕疵とともに特異な作家性が注目され、それゆえに「生々流転」は高く評価され、かの子評価も高められていった。

Ⅲ　単行本『生々流転』の同時代受容

九カ月にわたる連載の後、初刊単行本『生々流転』が刊行される。その際の広告「岡本かの子　生々流転」

（『文藝』昭一五・四）を次に引いておく。

咽ぶやうな肉感、生命（いのち）の河
豊麗、絢爛な最高峰の文学

女史逝いて早くも一年。
経る歳月と共にその声名は、ますます高まつてきたが、遺作として最初に発表されたこの作品こそ、現文壇に渦紋を投げた傑作であらう。咽ぶやうな肉感で描かれたこの物語は霊知の苦悩を湛え、美の世界を希求する、爛漫と豪華な牡丹にも似た極彩色の錦絵だ。しかも、その底を沈れる高遠な理想、魂の憧憬は人の胸奥をそくそくと敲かずにはゐない。真の文学、現代最高峰の文学である。（頁表記なし）

生前のかの子評価の延長線上で、『生々流転』を絶賛する右の文章は、はからずも具体的には捉えがたい同書の内容を、ごく抽象的な言辞でロマンチックにうたいあげている。同誌同号には、《岡本かの子が逝いてまだ一年余りだが、人々は死後なほ無尽蔵に残されてゐる遺作の山を見て、言ふべき言葉を知らない》、《だが我々が心から響（ママ）くのは、発表される作品毎にあらはに示されてゆく彼女の秘密の豊かさ》だとかの子の遺稿にふれる、無署名「書評　岡本かの子「生々流転」」（『文藝』昭一五・四）が掲載されている。

一口に言つて、この長篇遺作に出て来る蝶子やお艶は、かの子自身の姿である。艶子は生れながらにしてたくましい女性の生命力を具現してゐる。〔略〕彼女は自己に就いて最も豊富にして美しい語彙を持つてゐるが、鏡に映る自己の姿こそ、彼女に取つて最も美しいものであり、それゆゑにまた唯一の真実なものであつた。

こうして蝶子をはじめとした登場人物を《かの子自身の姿》だとみるこの書評では、『生々流転』に、《生命の可能性の豊富さ、奇怪さを前にして、眩暈してゐる彼女の姿》が見出され、《このやうな寓意的な虚構を設定しなければならなかつたのは、結局彼女が自己の心情の豊饒さに強ひられたためなのだ》（二七一頁）として、書き手のコントロールさえもこえていこうとする、かの子の〝いのちの豊饒〟が探りあてられている。

『生々流転』を《狂乱の祈禱書のやうなもの》だと評した「諸行無常　生々流転について」（『文学界』昭一五・五）の亀井勝一郎もまた、同書を《畢生の力をつくした最後の自己告白》だと捉えている。また、《作品と名づけていゝか小説と銘うつていゝか、さういふ名称を私は知らぬ》と、型を逸脱したかの子の魅力を、次のように論評している。

現に、生ま生ましく華いで、永劫の過去から未来へ流れ行くいのちの酷い狂乱がある。そして輪舞の一挙一動が、そのまゝ岡本氏の自己解析となつてゐるのだ。こゝに登場する男女諸々の象（ママ）が描けてゐるかどうかは末の問題であらう。氏が生涯に出会つた人々、また前世から背負はされてきたもの、それら一切の外面的位

置を大胆に抽象し、たゞ彼らの内奥に滾る生命のみを、絞り絞つて、この血液にかりそめの名を与へてゐるにすぎない。すべてが生の象徴によつて語られ、それが互に交流し、全体として氏自身を映す鏡ともなつて一種異様な自伝が形成されたのである。

亀井もまた、『生々流転』にかの子の《生命―生》を力強さのままに捉えようとし、さらに、同作には《以前の作品の全エッセンスが悉く含まれてゐる》（一一八頁）とも指摘した。いずれも、言語化しにくい『生々流転』を肯定的-積極的に評価した評言である。

それに対して、赤木俊は「岡本かの子「生々流転」」（『現代文学』昭一五・五）において、《その文体において、表現において、蝶子なる主人公が頽廃に迄至る過程において、幾つかの優れた点を持ちながらも、遂ひに虚構の文学の最も陥りやすき陥穽の中に身動きがとれなくなつて終つた》と否定的な評価を示し、その内実を次のように評している。

即ち、部分的な纏りがあるにも係らず、全篇を統一する力強い基調が途中で全く消失して終つた。いのちの哲学の如きは、その低俗さと独りよがりとの故に、読者を反発させ嫌悪させるだけである。（五三頁、傍点原文）

図式的に整理すれば、亀井が好意的に捉えた混沌としたダイナミズムを、ことごとく否定したのが右の赤木評

ということになる。その意味では、最終的な評価以前において両者はごく近しい作品理解を示しており、そのことは以後にふれる書評においても同様である。

『生々流転』を《最近の長篇小説の中で最も立派なもの》、《此の絢爛たる肉感と言葉の開花に対抗し得る如何なる現代作家もないことは確か》だと絶賛するのは、「最近の文学書（下）」（『東京朝日新聞』昭一五・五・四）の河上徹太郎である。《これが無条件で一流の小説といへるか如何か、それは疑問》という留保をつけながら、河上は次のようにして、小説の型を度外視して書かれた『生々流転』を、それゆえ肯定的に評価していく。

> いつて見れば、主人公の美貌で、早熟で、非情な少女が、その持つて生れた因縁を背負つて此の世を遍歴する姿を描き乍ら、作者は一般の小説家の法度とする気障つぽさや甘つちよろさや嘘つぱちや過度の空想を何の悪びれもなく自由に駆使し、遂に何人も及ばぬ大小説を描き得てゐるのである。

その上で河上は、《此の見事な「嘘から出たまこと」は、少くとも従来の我が作家の物語構成力の薄弱さを瞠若たらしむるに十分なもの》（六面）だとして、文学場における相対的なかの子の価値にまで言及していく。さらに、おそらくはかの子愛読者による、ごくごく私的な『生々流転』理解も参照しておこう。《私は之を読んだことをしみ〴〵幸福に思ふ》という「岡本かの子さんの「生々流転」を読む」（『京都帝国大学新聞』昭一五・五・五）の佐野綠詩は《むせ返る様な円熟し切つた、なめらかな肌合、あの童心的な、厚化粧で街杯一にしやなりしやなりと歩くしとやかさを持つたかの子さんの「生々流転」》について、かの子にごく好意的に次のような

絶賛を展開している。

初めは理解し難いかの子さんの小説の最後としてこの世に残して行つたこの書は世の人の歩みを瞥見しつゝ、鋭き知性は一貫して底を流れ、女らしい感性は流れ戯れる水草の様になよ〳〵とそれに取付いて奏する妙なる情緒のアンダンテ成す美しさに充ち、エロチツクを提しつゝも単にそれに堕せず、あでに優雅な嗜みとなつて人の心に滾々とあふれる（八面）

その一方で、生理的嫌悪ともみえるほどの非難を差しむけたのは、《「生々流転」といふ小説も現代最高の小説ださうだが、しかしいくら同情してもこれが人間の書いたものとは感じられない》と世評を対置して持説を展開する「蛍光燈　動物小説の流行」（『帝国大学新聞』昭一五・一〇・九）の杉浦明平である。《文学がその作家の本質を映すものなら》と仮定した上で杉浦は、論点・評語ともにかの子批判の集大成よろしく、次のように非難していく。

若い娘（白豚といふべきかも知れぬ）が現れて理由もなしに泥をぬつて乞食になつたり、変てこなおやぢとくつついたり、人間とは思へぬ行動をする。それは天才的といふのではなく、無神経、非常識さが豚の程度に到達してゐるといふのである。〔略〕その上その文章に対する無感覚さが出たらめな美文のデコレーションとなつてゐる。或人は之を豊かさといつてほめるけれど、私はこれを豚の本質である水ぶくれ脂肪ふとり

だと言ふのである。（六面）

ただし、この時期の『生々流転』理解は、表面的な評言の賛否ほどに割れてはいない。杉浦同様に、同作を絶賛した亀井勝一郎も「諸行無常」（前掲）において、『生々流転』の登場人物を人間ではない存在と捉えて、しかし次のように肯定的に評価していた。

「生々流転」にあらはれる男女は、人間にして人間ではない、つまり悉く慾天の集りであつて現実浮遊性を帯びてゐる。切実ないのちそれのみを純粋に求めた結果、所謂生活派的な要素は顧慮なく沫殺されてしまつたのである。一見夢幻的に見えるものが、氏にとつては現実のなかの現実であつた。（一二〇～一二一頁）

このようにして、単行本刊行後の『生々流転』は、賛否や観点の別にかかわらず、いずれもかの子の自伝として、少なくとも色濃くかの子自身が反映された作品と解釈され、意味づけられていった。また、小説の型―結構については、いずれも破格だという判断は共有されながら、作品評価の局面においては賛否へと分裂し、否定的な立場からは酷評された。一方で、肯定的な立場からは、他作家にはないかの子一流の特異性が、その審美性と併せて顕揚された。同様の分裂は、『生々流転』における文章や、現実性、等の論点にもみられ、それでいて評価の前提となる『生々流転』解釈はかなりの重なりをもっていた。

翻ってみれば、本稿Ⅱで検証したとおり、こうした傾向は初出時から明らかで、表面上は極端な賛否両論が展

開されながら、同時代に類例をみない破格の小説（らしきもの）と目されていたことは確かで、書評はそうした受容をより端的に表明したものといえる。

総じて、急逝の報道・追悼言説と踵を接して発表されていった岡本かの子の遺稿『生々流転』とは、賛否両面において、かの子その人と不可分な特徴をもった作品として、同時代から受容されていたのだ。そこには、時局と不可分に動いていく昭和一〇年代の文学場にあって、[18] 死んでしまったがゆえに、（時局とは直接関わらない地点で）独自の審美性がそれ自体として評価されるという、かの子に固有の条件も関わっていたようにみえる。[19] また、後年議論を集めることになっていく、岡本一平の関与についてはほとんど議論されておらず、当時は否定的な評価も目立っていたことも、今回の調査から明らかにできた。今後も同時代の視座から、岡本かの子研究を継続していきたい。

注

（1）小田良弼「自然――岡本かの子の小説（二）――」（『国語国文』昭三五・一）、二頁。

（2）津島佑子「大女のイメージ（岡本かの子全集第二巻付録　昭和四九年六月）」（『岡本かの子全集　別巻―付録』冬樹社、昭五三）、一三頁。併せて、丸谷才一「解説」（『日本の文学四六』中央公論社、昭四四）も参照。

（3）外村彰「岡本かの子「生々流転」論――「水の性」の在処――」（『佛教大学総合研究所紀要』平一九・三）、五一頁

（4）荒井とみよ「かの子論考「生々流転」について」（『大谷学報』平二・一二）、三五～三六頁。なお、荒井とみよには後に「岡本かの子という工房――ふたたび『生々流転』をめぐって――」（『大谷学報』平七・一）があり、そこでは《『生々流転』は長編とはいえ、短篇小説の集

積の形をとっている》、《その主なものは次のとおり》だとして、次のような整理を示している――《①父をめぐる物語、②母をめぐる物語、③F学園の物語、④安宅先生をめぐる物語、⑤葛岡をめぐる物語、⑥池上をめぐる物語、⑦番頭嘉六の物語、⑧両国川開きと製薬会社の五人娘の物語、そして仮の大団円となる》、《後半は蝶子の乞食行であるが、そこには次のような話が並ぶ》、《①夫婦乞食の話、②材木店のご新造の話、③文吉の話、④貸し船屋のお秀の話、⑤母子乞食お三の話、⑥学者乞食・花田の話、⑦百瀬・新百瀬家の物語、⑧おぢさん・市塵庵春雄とお艶の物語、そして再び大団円になるかにみえるが、そこからも物語ははみ出し流れだしていく》（二一頁）。

（5）川西政明「解説　諸行無常の「いのち」」（岡本かの子『生々流転』講談社文芸文庫、平五）、五二八～五二九頁。

（6）天沢退二郎「岡本かの子論（岡本かの子全集第四巻付録　昭和四九年三月）」（『岡本かの子全集　別巻―付録』前掲）、一〇頁。

（7）注（6）に同じ、一六頁。近藤祐子「解題・校訂」（『岡本かの子全集　第六巻』冬樹社、昭五〇）には、大いに教えられた。

（8）金井美恵子「岡本かの子（岡本かの子全集第七巻付録　昭和五〇年六月）」（『岡本かの子全集　別巻―付録』前掲）、六頁。

（9）岩淵宏子「『生々流転』のフォークロア――乞食の意味――」（『昭和学院短期大学紀要』平二・三）、四三頁。

（10）安藤恭子「岡本かの子『生々流転』――女体育家・安宅先生を中心に――」（安川定男編『昭和の長編小説』至文堂、平四）。

（11）関礼子「『生々流転』における女性一人称」（小田切進編『昭和文学論考　マチとムラと』八木書店、平二）、三三五頁。

（12）瀬戸内寂聴『かの子撩乱』（講談社文庫、昭四六）参照。

（13）宮内淳子「作家案内――岡本かの子」（岡本かの子『生々流転』前掲）、五四四頁。併せて、有吉佐和子・岡本太郎「々母々なるかの子」（『海』昭四九・八）他参照。

（14）こうした見方に関して、横井司「都を出る娘――岡本かの子『生々流転』試論」（『続岡本かの子作品の諸相』専修大学大学院文学研究科畑研究室、平八）は、《『生々流転』というテクストを論じる難しさは、よく問題にされるように岡本一平の手が入っているというレベルにあるのではなく、蝶子という語り手の存在規定のレベルにあるのではないだろうか》（一一五頁）という、テクスト論的な発想を対置している。なお、『生々流転』の作者に関して、高良留美子『岡本かの子　いのちの回帰』（翰林書房、平一六）でもていねいな検討が展開されている。

（15）注（4）に同じ、三五頁。

（16）拙論「岡本かの子の軌跡――同時代評価から没後追悼言説まで」（同『日中戦争開戦後の文学場　報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会、平三〇）参照。

（17）拙論「昭和一〇年代における『若草』「文壇時評」――〝詩〟と〝ヒューマニズム〟」（小平麻衣子編『『若草』論集』翰林書房、平三〇）参照。

（18）拙著『昭和一〇年代の文学場を考える　新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、平二七）参照。

（19）そうならなかったケースとして、堀辰雄が考えられる。伊藤整「解説」（伊藤整編『現代日本小説大系　第五十三巻』河出書房、昭二六）参照。

※原則として、初出の「生々流転」は一重括弧、単行本は二重括弧表記として区別した。なお、本研究はＪＳＰＳ科研費15K02243の助成を受けたものです。